

死にたいヤツら

作
弦巻啓太

● 登場人物

竹本信盛(故人)

近松門左衛門が専門の大学教授

竹本千夜

信盛の妻

初実

千夜の妹

ウメ

竹本家の家政婦

神谷小春

信盛の教え子

稲垣五郎

信盛の教え子、小春の交際相手

武蔵川典一

信盛の同僚

辰松

弁護士

※ 辰松と信盛は同一の役者が演じる

●プロローグ

舞台は簡素なセット(粹組み)で作られている。そこは竹本家邸宅の居間。和風の旧家屋を思わせる雰囲気。縁側、玄関、と一応の区分けが確認できる。劇場は白黒幕に囲われて、一見して法事の後を思わせる。客伝が消え、暗転すると遠くで出鱈目なお経が聞こえてくる。客入れの音は、いつの間にか木魚のリズムに…。やがて、チーンと音。

暗転が突然破られる。

声(千夜) 「どっという意味です!?(怒)」

明かり着く。テーブルに座している一同。全員、客である辰松の方に注視している。千夜、初実、武蔵川、小春、五郎、ウメが固唾を吞んで彼の発言を待っている。

辰松 「ですから…大変、申し上げにくいことではありますが」

千夜 「…愛、人?」

初実 「兄さんに、愛人がいたってこと…?」

辰松 「そのようですね。」

千夜 「ウーン、」(寝込む)

ウメ 「奥様!!」

武蔵川 「千夜さん! ちょっと千夜さん、気をしっかり!」

小春 「先生に、愛人!」

五郎 「しかも、かなり長い付き合いになるんですよね!」

辰松 「この遺言状の文面から察すると。」

「君、いい加減なことを言うんじゃないよ。確かなのかい? その遺言状。本当に竹本信盛が生前書いたものなのか!」

「確認を、」

武蔵川 「(もぎ取る)」

五郎 「(覗き込み)…本当だ。先生の字だ…」

小春 「いい加減なコト言っんじゃないよアンタ、」

五郎 「本当だって。小春も自分の目で確かめろ、て。」

初実 「こりゃびつくりだね…。あの朴念仁の兄さんに愛人がいたなんて。姉さんもショックだわこりゃ。生きてる? 姉さん、」

ウメ 「奥様、」

千夜 「(ムクリ)見せて！ 私にも見せて！」

武蔵川 「君、何かの間違いじゃないか？ 私は、長年彼と同じ職場で顔を合わせていたが、そんなそぶりは全く無かったよ。そりゃ、男だから、長い結婚生活の中、二、三回浮気とか多少の女遊びはあったかもしれないが、」

初実 「へえ。じゃ武蔵川センスにもあるの、そういう女遊び。」

武蔵川 「僕は無いよ！ 大体独身だ僕は。女遊びだなんて、ありえない。」

千夜 「…あの人の字だ…」

ウメ 「奥様、何かの間違いですよ、旦那様に限って、そんな。」

小春 「そつですよ。竹本教授はそんな人じゃありません。いつも言っていましたよ、自分は、妻を生涯愛し抜くんだって。」

五郎 「言ってたか？ そんなコト。」

小春 「五郎！」

初実 「あたしにも見せて。」(取る)

辰松 「正直、私共も困ってるんです。その遺言状には、自分の土地・家屋を除く、銀行口座を含んだ全ての資産、分り易く言うとな、この場合、銀行ですぐに現金化できる資産、その全てをそこに記された、我が愛人に遺産として譲り渡す、と書いてあります。具体的な名前は明記されてません。」

武蔵川 「…まさか、君、」

辰松 「ハイ、私共としましては、この“我が愛人”と言うのは、一体誰のコトなのか、それを教えていただきたいのです。」

武蔵川 「馬鹿なコトを言うな…」

辰松 「!? 馬鹿ですか？」

武蔵川 「どこの世界に愛人の存在を、その本妻に訊きに来る人間がいる。しかも、今日は故人の四十九日法要だよ、君、」

辰松 「ですからこそ、故人のことをよく知る方も多いかな、と。」

武蔵川 「常識をわきまえたまえ！ 見たまえ、君の行動で千夜さんはショックを受けてるじゃないか。」

千夜 「…知らなかった…愛人…あの人の、愛人がいたなんて……」

初実 「良い読みしてんじゃない？ よくドラマだとあるよね、お葬式とかにさ、一般参列に混じって愛人がこっそり紛れてたりすんのよ。せめて手だけでも合わせたいって、雨の中 出棺まで見送って、」

ウメ 「初実さん、」

初実 「隠し子とか連れて来てたりしてね。」

千夜 「子供!？」

武蔵川 「初実さん!」

初実 『「ホラ、おじちゃんに最後のお別れをしなさい。』『バイバイ、パパ』『パパって呼ぶんじゃありません!』』

千夜 「ウーン。」

ウメ 「奥様! 大丈夫ですよ! 何かの間違いです。そんな愛人だなんて、いる訳がありません!」

五郎 「確かに、その文面からじゃ誰のコトか分かりませんよね。」

辰松 「ハイ。なので、私共も困ってるんです。」

初実 「ふうん。厄介な遺言残したものね、兄さんも。」

武蔵川 「人騒がせな奴だ。おとりしてるようできて、周りの人間を無自覚に振り回すんだ。いつもそうだった。死んでまで…全く、残された人間の気持ちを考えろ、ってんだ。」

五郎 「分った!」

小春 「え?」

千夜 「五郎君、知ってるの!? この愛人が誰か!？」

辰松 「ご存知なんですか!？」

五郎 「いたずらじゃないですか?」

間。

小春 「え?」

「ですから、いたずらですよ、教授の。自分が死んだ後、ちょっとみんなをどきまぎさせてやろう、っていう遊び心なんじゃないですか?」

初実 「人が悪すぎじゃない?」

小春 「法律事務所の人まで巻き込んで?」

五郎 「違うかなあ?」

ウメ 「私も! そう思うなあ。旦那様って、結構、何て言うのかしらねえ、洒落ッ気というか、少年心? ボウケンスピリット? そういうの、いくつになっても失わない所がありましたよね。」

初実 「ウメさん、昔から兄さんのコト知ってたの？」

ウメ 「へっ。」

初実 「そんな言い回しだったよ。“少年心をいくつになっても失わない”」

ウメ 「いえ……この、半年の間は、て意味ですよ。」

武蔵川 「いたずらだとしたら、とんでもないね。」

千夜 「でも、そうだと思いたい……」

辰松 「奥様、本当に、心当たりはありませんか？ 生前ご主人にそのようなそぶりは少しも見当たりませんでしたか？」

武蔵川 「無いに決まってるじゃないか……」

辰松 「大事なコトです。奥様？」

千夜 「帰って下さい。」

辰松 「……お気持ちはお察しますが……奥様、」

初実 「……にしても、兄さんに資産が残ってたつてのが驚きたね。すつからかんで死んだんじゃないかったんだ。」

五郎 「そうですね。この家と庭を残すのだったで大変だったんですね、奥さん。」

ウメ 「そりゃあもう。旦那様も本当にお金に頓着しない方だったので。」

初実 「ねえ、辰松さん。もしその愛人が見つからなかったら、その遺産は誰が貰うことになるの？」

辰松 「一定の期間を越えても、この遺言状の指す“愛人”に該当する方が名乗り出なかったり、私共が見つけれなかった場合、配偶者である奥様に相続していただきます。奥様に拒否される意志が無い限り。」

初実 「なあんだ。グッドニュースじゃん。姉さん良かったじゃない。いくらかでも遺産残してくれてた訳だから。」

ウメ 「そうですね、気にすること無いですよ。」

五郎 「でも、その“愛人”が現れなかったら、ですよね。」

小春 「いるわけ無いでしょ、そんな愛人！」

千夜 「私、お金なんて……」

武蔵川 「千夜さん、考えようだよ。無理して突っぱねることはない。」

初実 「そうそう。良い子ぶつてると後で後悔するよ。貰えるものは貰っとけば良いんだつて。福岡でも教室開いたら大変になるんだから。……ところで辰松さん。その遺産つてさ、いくらくらぐらあるの？」

千夜 「初実！」

初実 「良いじゃん。支障無かったらで構わないからさ、教えてくれない？」

辰松 「……二億です。」

間

全員辰松以外 「にい!？」

辰松 「ハイ。二億です。正確に申し上げると、税を差し引いて、二億飛んで七五万六千九二三円になります。」

凍りつく一同。

千夜 「ホントに…辰松さん、それは、」

辰松 「嘘じゃありません。」主人の遺された遺産は、二億円です。」

小春 「それ全額を…この、“愛人”に？」

辰松 「それが故人の「意志」だったようです。…これで、私がこうして、夜分にもかかわらず、非常識に足を運んだ理由がお分かりいただけただけではないでしょうか？ 額が額だけに、私共も必死なのです。何せ、何一つ、この“愛人”が誰なのか示す手掛かりが、この遺言状以外見つからない状態なのです。」

間

辰松 「もう一度、お聴きします。亡くなられた「主人、“竹本信盛”様がここに記された“愛人”について、何かご存知の方はいらっしやいませんか？ または、正に、私がその“愛人”だと名乗り出る方はいらっしやいませんか？」

初実、ウメ、小春が手を挙げる。

辰松 「え？」

三人 「実は私です！」

千夜・五郎 「ええ!!」

三人 「(お互いを見合って)ええ!？」

武蔵川 「(手を挙げ)じゃあ僕です！」

五郎 「あんたも!？」

暗転。

音楽が流れる。

タイトル『死にたいヤツら』

明かり着く。玄関となっている方向と思しき場所からゾロゾロとみんな入って来る。

初実 「いやぁー終わった終わった。あー疲れた。話長いつてね、あの坊さん。」

皆、喪服を着ている。以下入ってきながら。

武蔵川 「みんなあんなもんじゃない？」

初実 「お葬式の時も長々と話して。もう飽き飽き。あー足しびれた。何かさ、あの坊さん無理に笑いとろうとしてた感じしない？」

武蔵川 「そうかなあ。」

初実 「絶対そうだって。お経読んでる時さ、急にリズム良くなんかった？」

五郎 「なりました なりました！」

初実 「ラブ調にアレンジしてたじゃんあの坊さん。お葬式の時ちょっとウケたからさ、味をしめたのよ。」

五郎 「そう言えば、やりましたね、お葬式の時も。」

初実 「あの時は何て言うの？」「うう、『たまたまなっちゃった』的に笑えただござ、何!? さっきのアレ、もう意地でも笑いが欲しいみたいにゴリ押ししちゃって。誰もってこないもんだから焦ったのよ……！」

五郎 「あざといですね。」

初実 「あとアレ！ ビートたけしみたいになさ、木魚叩こうとして(自分の頭に)こっとなってたじゃん。わざとらしい。どう間違えたって手がこくに良く訳ないじゃん。ねえ、」

五郎 「哀れだなあ……」

初実 「もつと笑えるお坊さんが良かったなあ。何の為に四十九日に来てもらったか分からない。」

武蔵川 「笑わせてもらう為じゃないと思うよ。」

ウメ 「何か入れましようか、お茶でも。」

小春 「私、手伝います。」

ウメ 「あ、いいですよ、気にしないで。」

小春 「でも、」

初実 「ウメさんも良いよ氣イ使わないで。今は立派なお客様なんだから。堂々と座ってれば良いのよ。姉さんにやらせれば良いの、そんなコトは。」

ウメ 「でも…なんかクセで、落ち着かないので。お茶で構いませんか？ 武蔵川先生は、コーヒーですね。」

武蔵川 「すいません。」

五郎 「あ、僕も。」

小春 「五郎…」

五郎 「何だよ、」

小春 「ずうずうしいでしょ、遠慮しなさいよ。」

五郎 「だって…」

ウメ 「良いんですよ、小春さん。じゃあお茶と、コーヒー2ツで。」

五郎 「ミルクもお願いします。」

小春 「ちよつと…」

ウメ 「分かりました、すぐ用意しますね。」←出てく。

五郎 「すみません、」

小春 「本当によめてよね、恥ずかしい真似。自分ちじゃないんだよ。先生の家なんだから。」

五郎 「(怒られて)コメン…」

小春 「大体なんなのその格好！ ぶったまげるわその常識の無さ。」

五郎 「今、黒い服これしかなくて。」

五郎、パンクファッションで首に直にネクタイを巻いている。

小春 「ホントやだ。もう、生きてる内に先生からもう少し勉強しといてよ。」

武蔵川 「良いんじゃない？ アイツも、身なりに気を使わないタイプだったから。」

五郎 「ですよね、」

小春 「そう言う問題じゃない、」

初実 「大変だね五郎君。頭が上がらないじゃない。」

五郎 「ホント、もう少し丸くなってくれろと助かるんですけどね。」

小春 「うるさい。」

千夜、入って来る。